KANAGAWA
NEWS LETTER 1991. 3 No.8
〒221 横浜市神奈川区六角橋3-27-1 電話(045)481-5661㈹ 神奈川大学外国語研究センター

中国語学短期留学の報告 ——引率教員の目から——

尾上 兼英

昨年８月４日、中国語学科３年生38人と貿易学科２年生１人の計39人を連れて、山口教授と北京の中央民族学院へ４週間の語学研修に出発した。中国への語学研修は初めてではなく、これまで北京科技大学への個人としての短期留学の斡旋などはしていたが、中国語学科の教育の一環として企画された最初のことであり、40人近くの人数は初めての経験なので、報告する次第である。

受入校の選定は、たまたま私が88年９月から89年９月まで、北京日本学研究センターの日本側責任者として出向していたので、物色を依頼され、北京を中心に東北地区、江南地方の大学を調査し、打針した。それぞれに長短があり迷ったが、方言差の大きい中国では、折角習得したことばが街へ出てすぐ通用しなければ、学生諸君の落胆が目に見えるし、初めての訪中という学生が多いことを思えば、やはり北京が最善と考え、北京大学始め諸大学を参観し、評判なども聞いて歩いた。その結果、こちらの条件に最も適切な対応が期待できるのは中央民族学院であるとの感触を得たので、中国語学科の同僚の判断を仰ぎ、決定した。

中央民族学院は、55を数える少数民族のリーダーを養成する大学で、各民族の文化が正当に評価され、漢語以外の言語に対する偏見のないところであり、漢字文化圏の東端に位置する日本人にとって違和感が少ないであろうというのも、選定理由の一つである。

研修は８月６日から31日、月—金の午前４時間、木の午後２時間補講、それ以外は自由時間、週末は北京周辺への小旅行３回（万里の長城、周口店など）京劇、雑技参観なども学院側が計画してくれた。自由時間は市内参観にあてたようで、学生諸君は結構“北京通”になったようである。しかし、中国での生活は食事時間を中心に組まれており、時間外には自由に食事のできる場所は限られているので困ったようである。また、出発前から注意しておいたことであるが、油の多い食事で腹こわしをしたり、風邪をひいたりという程度の病人はかなり多かったようである。夏時間が採用されているので、朝は眠く、夕食後も太陽が輝いているので、日頃のリズムと合わず当惑したのではなかろうか。

89年６・４の後遺症を懸念する人もあったが、（事実、北京の人通りは目に見えて少なくなっていた。100万人いたといわれる浮動人口の大半が郷里に追い返されたためと聞いた）90年のアジア大会で警備は厳重であり、治安については楽観していた。ただし交通規則が違うので、そのための事故と、タクシーがホテルでしかつかまらないので、門限までに全員帰ってこられるかを心配したが、杞憂に終わったのは、学生諸君の自覚によるところ大と確信した。

研修終了後の１週間、杭州、蘇州、上海へ参観旅行をした。中国語に自信をつけた学生は、修学旅行気分もあって、それぞれ羽を伸ばして楽しく過ごしたようである。ただ残念なことは、中国側も夏休みのため学生間の交流が思うようにできず、中国の表面だけかいなでの認識に終わったのではないかということである。何故自転車が多いか、生存競争さながらに他人を押しのけて恥じないバスの乗客、日本語で親切に説明をしてくれた老人、仏頂面で対応する店員など学生諸君のカルチャーショックを、フランクに話せる同年代の“朋友”ができれば、さらに成果があったろうと思う。今後に期待したいことである。